



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	レイモン・アロンの国際関係思想：『諸国間の平和と戦争』（1962年）における方法と歴史認識
Author(s)	池寄，航一
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(法学)
Dissertation Number	甲第16699号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16699
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99544
Type	doctoral thesis
File Information	Koichi_Ikezaki_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（法学）

氏名：池寄 航一

審査担当者	主査 教授	辻 康夫
	副査 教授	中村 督
	副査 准教授	土井 翔平

学位論文題名

レイモン・アロンの国際関係思想
——『諸国間の平和と戦争』（1962年）における方法と歴史認識——

【本論文の内容】

本論文は、レイモン・アロンの国際関係思想を分析し再評価するものである。第1章は本論文のテーマを提示する。アロンの主著『諸国間の平和と戦争』は現状の包括的分析として、フランスのみならず英米圏でも高く評価された。他方、理論的側面への評価は限定されていたため、時間とともに忘却されることになった。そこで著者は、アロンの政治認識・判断の手法の核心を「方法的総合」と「歴史的総合」を組み合わせた「総合」ととらえて、再構成する見通しを示す。

第2章では、「方法的総合」が分析される。アロンは国際関係の考察のために「理論」「社会学」「歴史」「実践学」の四つの方法を組み合わせる。「理論」は国際関係の体系を他の体系から区別し、そこにおける合理的な行為者を措定する。「社会学」は、行為者の行為に影響を与える一般性を持つ諸要因を分析する。「歴史」は、一回的な状況を固有の相のもとに認識する。「実践学」は当為についての指針を示す。

第3章では、アロンがクラウゼヴィッツの再解釈により、冷戦を認識する枠組みを獲得したことが示される。クラウゼヴィッツは、ナポレオン戦争によって「絶対戦争」が出現したこと、他方で、多くの戦争が限定戦争にとどまっていることを認識し、両者を統一的に理解するために「政治と戦争の代替可能性」の認識に至る。アロンはこの議論を蘇らせ、外交と戦争を、政治の手段とみなし、政治が適切に目標を設定して、両者を使い分けることで、暴力の烈度を抑制しようとする。このように、過去との断絶と連続を見据え、過去の手法を修正しつつ利用する手法が「歴史的総合」である。

第4章では、国際体系の歴史的変遷の中に冷戦が位置づけられる。アロンは国際体系を、諸国の力の配置によって「多極」と「二極」に区別し、また、諸国の政治体制の正統性原理の「同質性」と「異質性」によって区別する。現在の国際体系は、「二極」で「異質」な体系である。マルクス主義は、被抑圧者の救済、人類による自然への支配、社会の合理的組織化の観念を結合させ、大きな影響力を獲得したが、労働者階級が革命を起こす必然性はなく、これを補うためのレーニンの革命政党の理論が独裁を呼び込む。このモデルが広がり、現在の体系が出現する。

第5章では、西側諸国の政治戦略が議論される。アロンによれば国際政治においては国家的エゴイズムが必要であるが、理念・規範・権利の尊重も必要であり、両者を使い分ける必要がある。

また、人間が将来、権力政治を克服して平和に至る可能性を否定すべきでないが、当面は権力政治に対応することが必要である。アロンの示す西側の戦略は、東側との全体戦争を回避し、降伏も回避して民主主義の体制を守るものである。その際、核の恐怖による平和の期待も、一方的軍縮も不適切であり、通常兵器も用いた柔軟な戦略により、暴力行使の烈度を抑制するべきである。西側は、東側に侵略を断念させることをめざし、長期的には東側の変革を待つ。植民地には独立を認めつつ、その後の関係を重視する。このように多重の「総合」をふまえ、状況のなかで様々な考慮を組み合わせて判断するところに、アロンの「慎慮」「英知の倫理」が存する。

【評価】

本論文は、アロンの国際関係思想の構造を解明し、再評価を試みるものである。著者はアロンの思考・判断を「方法的総合」と「歴史的総合」によって特徴づけ、説得力のある分析を行っている。ハンス・モーゲンソーやケネス・ウォルツら同時代の理論家との比較を通して、アロンの位置を見定める作業も的確になされている。フランス語のテキストの読解も正確であり、アロンの多くの著作に加えて、関連する多数の一次文献、二次文献を読みこなして手堅い議論を行っている。日本語もよく推敲されている。全体として、国際関係思想史における貢献として高く評価できる。

本論文に望まれる改善点は以下のとおりである。第一に「方法的総合」をめぐる複雑な叙述に改善の余地がある。アロンは「理論」「社会学」「歴史」などの語に独特の意味を持たせているため、それを意識しつつ、理解しやすく叙述する必要がある。

第二に、本論文はアロンの国際関係思想を再構成し当時の位置を検討したが、アロンの思想が、将来の国際関係論の発展に寄与する可能性についても議論することが望まれる。

第三に、本論文は、国際関係論研究の脈絡からの分析であるが、今後はより多角的な検討をおこなうことも期待される。アロンの初期からの思想の変遷、関連するトピック（マルクス主義、アルジェリア問題など）、同時代のフランス政治思想などを視野に入れた検討も、厚みを加えると思われる。

このように、本論文はいっそうの改善の余地があるものの、すでに十分に高い評価に値するものであり、審査員は全員一致で、博士（法学）の授与が妥当であると判断した。